

シェイクスピアの強意語

三輪 伸春・内田 裕子*

はじめに

特定の単語を頻用するとその単語の意味は弱められる傾向がある。例えば、元来、即時的未来‘at once’を意味していた immediately, soon, anon, presently, by and by 等の語は、「きちんと時間を厳守することを何となく心のどこかでいう人間の性癖 (procrastination)」によって意味が広げられ、弱められて、現在では近時的未来‘before long’を意味するようになった (cf. J.B.Greenough & G.L. Kittredge, *Words and their Ways in English Speech*, 1920, p.293)。このような人間心理が原因となって、単語の意味は弱まる場合がある。そしてその語の意味が弱まり陳腐になると、その意味を補うために別の単語によって取って代わられる。こうして意味は変化し、次々と新語が生み出される。その代表的なものが強意語である。

強意語とはいったいどのようなものなのか。ストッフエル (C.Stoffel, *Intensives and Down-toners*, 1901), フランツ (W.フランツ, 『シェイクスピアの英語』) をもとに、下のように定義できる。強意語とは、形容詞・副詞・動詞の表す性質・動作の程度・強度を高める副詞である。それらの語は、最初は単に程度・強度を高めるだけではなく、その語の持つ特殊な意義の香りを漂わせているが、頻繁に使用されるにつれてその香りが失せ、陳腐な強意語となってしまふ。そこで、奇抜な誇張的表現を工夫するようになり、強意語に新陳代謝が行われることになる。また、強意語は、時代と共に変化するばかりでなく、同

*平成12年卒業、沖永良部高校教員

一の時代においても社会階層によって異なり、各時代、各社会にそれぞれに特有の強意語がある。

シェイクスピアの作品に *passing* を強意語として用いた *passing fair* が 5 例みられる。

- (1) Is she not *passing fair* ? TGV IV.4.148
- (2) Love, whose month is ever May,
Spied a blossom *passing fair*
Playing in the wanton air: LLL IV.3.100~102
- (3) Show me a mistress that is *passing fair*,
What doth her beauty serve but as a note
Where I may read who pass'd that *passing fair* ? ROM I .1.234~236
- (4) Love, whose month is ever May,
Spied a blossom *passing fair*,
Playing in the wanton air: PP. 16.2~4

これらに見られる一見現在分詞形の強意語 *passing* は一体何か。シュミットの *Lexicon* によると、形容詞と副詞の前にのみ用いられ、‘exceedingly’ を意味するという。またフランツの『シェークスピアの英語』には、以下の説明がある。

今日廃れた *passing* ‘exceedingly’ は、17世紀に非常によく用いられた強意語であったが、ただ形容詞及び副詞の前にのみ現れる。

(フランツ, 『シェークスピアの英語』, p.558)

そこで、なぜ現在分詞形が強意語になるのか、また一般的に強意語とは何か、どういう語が強意語になりうるのか、それぞれの語の特徴は何なのかを考えてみる。

まず、強意語とは一体何か。ストッフエルは『強意語と緩和語』の中で、強意語について以下のように述べている。

形容詞や副詞を修飾する強意語について一般に言えそうなことは、その大部分が「絶対性」をあらわす形容詞、すなわち pure, full, very などのように性質の変異を許さず、極めて厳密な意味で比較というものを許さない形容詞に由来する副詞であるということである。

しかし、もともと「完全性」をあらわしたこれらの強意語の大部分は、やがて単にある性質の「程度が高いこと」を意味するようになった。そしてこのことは語史に関しての確立した事実の一つとぴつたりと合致するもので、頻用はとかく語の意味を弱めがちになるということである。一般の話者は誇張されたことばを使いたがり、オーバーな表現をしたがるので、こういう目的で使われた語そのものが一般評価では割引され、掛け値なしに受け取られるようになるが、このありのままの評価は、原義的に意味するものよりは通例はるかに下回るものである。

もしこの種の語を原義どおりの意味に理解すべきであるということを聞き手に強く印象づけようと思うと、そのためには聞き手の注意を促す異常な強調が必要である。(中略)

このように多数の強意語などになる副詞が、原義的には「完全さ」をあらわしているのに、その意味が弱まりその結果高度とか相当程度という観念をあらわすようになっていく。こうした変化は常に起こっているもので、絶えず新語が要求されている。というのは、従来の語では性質の完全さとか、問題の状況下で可能な最高度の観念を表現するのに不適切だと感じられるからである。つまり、ある種の副詞では意味が絶えず弱まり強意的でなくなっているため、それに代わって他の語が性質の完全性を表現しなければならない。(ストッフエル、『強意語と緩和語』, pp.1~2)

つまり、強意語は一般に比較を許さない形容詞に由来する副詞である。しか

し「完全性」をあらわす強意語の大部分は、単に「程度が高いこと」を意味するようになった。というのも人間は誇張されことばを使いたがり、オーバーな表現をしたがるので、聞く側が意味を割り引いて聞くためもとの意味が弱まる。つまり頻用することで、語は本来の意味を失う。このような変化は常に起っているのです、絶えず新語が要求される、ということである。

ストッフエルの説をふまえてフランツは『シェークスピアの英語』（第二版）で、

大体から言って、強意語というものは非常に移り易く、変化し易い性質のものである。抵抗力が殆どなく大抵は生命力も長くないので、それは安定性の殆どない表現手段の一つである。ある一つの意味から発して、それは先ずその意味の範囲内で発達するが、使用度が大きいのでこの範囲を越えるようになり、周囲の事情が幸いすれば、大いに普及して全く純粹の強意語となり終り、遂にはこの機能では余りにも平凡、無内容のものとなってゆく。そうするともっと表現力のある強調手段を求める心が、ほかのものをその代わりに登場させる。そこで強意語の間では、いつの時代も、造語はしないにしても大抵は新語形を好むということになってくる。というのは、すべての社会層はその教育、職業、人生観に従って、それ特有の強意語を用いるからである。

（フランツ、『シェークスピアの英語』，1909，p.552）

と述べている。つまり、強意語は変化し易い性質で、抵抗力が殆どなく生命力も長くない。使用頻度が大きいとその意味は弱まり、別の語が要求される。またすべての社会層はその教育・職業・人生観に従って、それ特有の強意語を用いるので、常に新語が要求される、ということである。

ストッフエルやフランツ以外にも、ブルックやシェーラー、市河三喜なども強意語について述べている。それらを基に強意語は以下のように定義される。

強意語とは、形容詞・副詞・動詞の表わす性質・動作の程度・強度を高める

副詞のことである。それらの語は最初は単に強度を高めるだけではなく、その語の持つ特殊な意義の香を漂わせているが、頻繁に使用されるにつれてその香が失せ、陳腐な常套的な強意語となる。そこで奇抜な思いつきや誇張的表現を工夫することにより、強意語には烈しい新陳代謝が行われるようになる。また強意語は、時代的に変化するだけでなく、同一時代においても社会層によって異なる。つまり各時代、各社会にそれぞれ特有の強意語があるのである。

上記の定義で強意語は「時代的に変化する」と述べたが、その最もはっきりした例は、今日よく用いられる awful(ly), jolly, precious, tremendously などの強意語が、シェイクスピアでは未だ全然知られていないということである。また逆に、シェイクスピアでは盛んに使用されている excellent, marvellous, merely などは今日、その単語そのものは残っているが、もはや強意語としての機能は廃れている。

そこでシェイクスピアの作品に用いられている強意語を中心に、どういう語が強意語になりうるのか、それぞれの語の特徴は何なのか、なぜ現在分詞形が強意語になるのか、強意語はどのように変遷していったのかなどを詳しく考察する。

シェイクスピアに現れる強意語とそれらに関係する強意語を、形によって以下のように大別する。

A	A-1: 現在分詞形の副詞	exceeding, passing
	A-2: A-1の -ly 形の副詞	exceedingly, passingly
B	B-1: 形容詞と同形の副詞	abundant, clean, clear, cruel, damnable, excellent, full, grievous, horrible, intolerable, main, marvellous, mere, monstrous, plaguy, right, shrewd, sore, through, wondrous
	B-2: B-1の -ly 形の副詞	cleanly, clearly, cruelly, damnably, excellently, grievously, horribly, intolerably, mainly, marvellously, merely, monstrously, plaguily, shrewdly, sorely, throughly, wondrously
C	名詞形の副詞	vengeance, whoreson
D	特殊例	home

第1章 A. 現在分詞形の副詞とその -ly 形の副詞

それぞれの語の特徴を調べるために、シュミットの *Lexicon* とフランツの『シェイクスピアの英語』、OED を参考にしながら一つ一つの単語について見ていく。

A-1, PASSING (×25)

‘exceedingly, very’ の意味の *passing* は25例現れる。

- (1) Is she not *passing* fair ? TGV IV.4.148
- (5) For Oberon is *passing* fell and wrath,
Because that she as her attendant hath
A lovely boy stolen from an Indian King; MND II.1.20~22
- (6) If you call me Jephthan, my lord, I have a
daughter that I love *passing* well. HAM II.2.411~412

シュミットは ‘used only before adjectives and adverbs’ としたうえで22例を挙げている。フランツは「17Cに非常によく用いられた強意語」「ただ形容詞および副詞の前にのみ現れる」として、MND II.1.20とADO II.1.81の2例を挙げ、ブルックはMND II.1.20のみを、シェーラーもHAM II.2.412のみを挙げている。OED にも、

B.a. In a passing or surpassing degree; surpassingly, pre-eminently, in the highest degree; exceedingly, very. (With adjs. or advbs. only.) Now somewhat arch. (OED, *passing*)

とあるが、なぜか OED は25例もあるシェイクスピアの例を1例ものせていない。結局、*passing* は、形容詞と副詞の前にのみおかれ ‘exceedingly, very’ を

意味する強意語である。

A-2, PASSINGLY (×0)

passing と同じ意味の *passingly* がシェイクスピアの時代にすでに強意語として存在していたことは OED からわかる。しかしシェイクスピアは *passing* を 25 回も強意語に用いているのに、*passingly* は 1 度も用いていない。

b. In a surpassing degree or manner, surpassingly; pre-eminently, exceedingly;
= passing. (qualifying adj., adv., vb.). arch.

(OED, *passingly*)

A-1, EXCEEDING (×19)

‘extremely, exceedingly’ の意味の *exceeding* は 19 例現れる。

(7) You grow *exceeding* strange.

MV I .1.67

(8) So-very

well, go to, very good, *exceeding* good.

2H4 III .2.273~274

(9) O, very mad, *exceeding* mad, in love too;

But he would bite none.

H8 I .4.28~29

シュミットは ‘never joined to verbs’ として 17 例を挙げている。OED も ‘Pre-fixed to adjs. or advbs.’ として ADO III .4.25 を例に挙げ、この意味では ‘Very common in 17-18th c.; now somewhat arch.’ といっている。フランツは「決して動詞に伴っては現れない」として、ERR I .1.57, MV I .1.67 の 2 例を挙げている。つまり *exceeding* は *passing* 同様形容詞と副詞の前にのみ用いられる強意語で、17, 18 世紀には非常によくもちいられた。

A-2, EXCEEDINGLY (× 4)

またフランツは、シェイクスピアにおいては *exceedingly* のほうが使用度数が少ないとして、1H4 III.1.164を例に挙げている。

- (10) O, my good knave Costard, *exceedingly* well met! LLL III.1.144
- (11) In faith, it is *exceedingly* well aim'd. 1H4 I .3.282
- (12) In faith, he is a worthy gentleman,
Exceedingly well read, and profited
 In strange concealments, (...). 1H4 III.1.163~167
- (13) My money is
 almost spent; I have been to-night *exceedingly* well
 cudgell'd; and I think the issue will be, I shall have
 so much experience for my pains; OTH II .3.364~367

これらは全て *exceedingly well* の形でしか現れていない。シュミットも ‘mostly followed by *well*’ としてこの4例を挙げている。これらから、*exceeding* が形容詞と副詞のみを修飾するように、*exceedingly* は *well* のみを修飾するように思われる。しかし OED では、

In an exceedingly manner or degree.

2. Of degree: Above measure, extremely:

a. with verbs; formerly in extensive use, now chiefly limited to those that indicate emotion, feeling, or the expression of them.

b. with adjs. and advbs. Now only with the positive deg.; formerly occas. prefixed to *more*, *too*. (OED, *exceedingly*)

となっている。つまり、形容詞や副詞のみを修飾するのではなく、動詞をも修飾するのである。また ‘formerly occas. prefixed to *more*, *too*.’ ともある。しか

しシェイクスピアが *exceedingly well* の形でしか用いていないことから、この時代にはこの形が主流だったことがわかる。また、フ란ツが言うように *exceeding* のほうが使用頻度が高いことから ‘*extremely, exceedingly*’ を意味する強意語としては *exceeding* が一般的で、これは *exceedingly* とは異なり、決して動詞を強調することはない。

以上に見られる *passing* と *exceeding* は現在分詞形の副詞だが、この形が副詞として用いられる理由は次のようなことである。現在分詞形は動詞だけでなく形容詞としても扱われる。16世紀頃から形容詞と副詞は形のうえで区別がなくなり、あらゆる形容詞が副詞としても用いられるようになった。そのため形容詞である現在分詞形が副詞として用いられるようになったのである。また、ラテン語の *-ent* ‘*-ing*’ は現在分詞語尾で、*excellent* や *abundant* が副詞として強意語になっている。その類推で *-ing* 形も副詞として使用されるようになったのである。これとは別に *passing* は意味の上では、強意語としては不適切に思われるが、*passing* は *surpassing* ‘*greatly exceeding or excelling others*’ の語頭 *sur-* ‘*super-*’ の脱落によるものなので、強意語に用いられるようになった。

第II章 B. 形容詞と同形の副詞とその *-ly* 形の副詞

§1. 形容詞と同形の副詞とその *-ly* 形の副詞

B-1, CLEAN (×12)

‘*quite, entirely*’ を意味する *clean* は12例現れる。

- (14) Five summers have I spent in forthest Greece,

Roaming *clean* through the bounds of Asia,

And coasting homeward, came to Ephesus;

ERR I .1.132~134

- (15) Your lordship,

though not *clean* past your youth, (…),

and I most humbly beseech your lordship to

have a reverend care of your health.

2H4 I .2.96~100

(16) indeed, it is a strange-disposed time;

But men may construe things after their fashion,

Clean from the purpose of the things themselves.

JC I .3.33~35

シュミットはこれら12例すべてを、シェーラーは2H4 I .2.91を例に挙げている。フランツは「シェイクスピアの時代において、今日の日用語よりも広範囲に用いられた。今日の日用語でもそれはよく用いられる。」として Son 75.10と 2H4 I .2.91の2例を挙げている。なぜ *clean* が強意語として使われるようになったのか、OED に詳しい説明がある。

II. Of degree.

5. Without anything omitted or left; without any exception that may vitiate the statement, without qualification; wholly, entirely, quite, absolutely.

This sense naturally arose from the consideration that when a substance is taken entirely out of any vessel, etc., without leaving a particle behind, the vessel is left clean, and its cleanness is a measure of the completeness of the removal. Hence *clean* was naturally used with all verbs of taking, driving, or going away, of losing, and thence of finishing up, completing, or performing any action.

a. with verbs of removal, and the like. (The use of adverbs or prepositional phrases qualifying the verb introduces const. c.)

b. with other verbs.

c. with prepositions and adverbs, as *against, without, beside, away, from, through, out, over*, etc.

d. with such adjectives as *contrary, different, other, contradictory, impossible, wrong*, etc.

(OED, *clean*)

つまり clean は、意味・用法の性質上強意語になりうるのである。また clean は先に挙げた passing や exceeding のように形容詞や副詞のみに用いられるのではなく、動詞や前置詞など広範囲に用いられる強意語である。

B-2, CLEANLY (×2)

また cleanly も強意語として2例現れる。

- (17) What, hast, not thou full often strook a doe, And borne her *cleanly* by the
keeper's nose ? TIT II.1.93~94

- (18) The hot scent-snuffing hounds are driven to doubt, Ceasing their clamorous
cry till they have singled With much ado the cold fault *cleanly* out;
VEN 690~694

これは OED に ‘Completely, wholly, entirely, quite; = clean. Obs.’ とあるように clean と同じ用法である。そのため clean が強意語として生き残ったのになんて、cleanly の強意語としての機能は廃れた。

B-1, EXCELLENT (×20)

‘eminently, exceedingly’ を意味する excellent は20例現れる。

- (19) ‘So, so’ is good, very good, very *excellent* good; and yet it is not, it is but
so, so. AYL V.1.27~28
- (20) Excellent well. OTH II.3.117
- (21) ‘Tis very true, thou didst it *excellent*. SHR ind.1.89

しかし、excellent の強意語の機能はすでに廃用となっている。

† C. = excellently. Obs.a. With verbs. b. With adjs. and ppl. adjs.; with the

latter often hyphenated. c. With advbs. *well, ill*. (OED, excellent)

a は1483, 1607 (TIM I .1.29), 1642の3例, b は1586, 1586, 1681, 1719の4例, c は 1590, 1604 (OTH II .3.117), 1612, 1756の4例のみで, これらはいずれも約200年ほどで強意語の機能は廃れている。シェイクスピアに現れるこれら20例のうち9例は excellent good の形で用いられている。しかし c では well や ill に用いられるとあるが, excellent good が9例なのに対して excellent well はたったの2例しかないうえに, excellent ill は1例もない。また excellent は clean と同じく動詞も強調するが, シェイクスピアでは2例しかみられず, それ以外はほぼ形容詞とともにもちいられている。シュミットは動詞5例を含む13例を挙げているが, そのうち動詞の3例は強意語にあてはまらない。ブルックは HAM II .2.174を, フランツは OTH II .3.117と TN II .3.44を例に挙げている。

B-2, EXCELLENTLY (×4)

またフランツは稀に excellently が excellent と同じ意味で現れるとして ADO III.4.13を例に挙げている。

- (22) I like the new tire within *excellently*, if
the hair were a thought browner; and your gown's
a most rare fashion, i' faith. ADO III.4.13~15
- (23) I would be loath to cast
a way my speech; for besides that it is *excellently*
well penn'd, I have taken great pains to con it. TN I .5.172~174
- (24) *Excellently* done, if God did all. TN I .5.236
- (25) Therefore this letter, being so *excellently* ignorant,
will breed no terror in the youth; he will find it comes
from a clodpole. TN III.4.188~190

シュミットは全部で6例現れる *excellently* のうち、TRO IV.1.25のみを強意語ではないと判定し、上の4例とは別に、AWW IV.3.210を強意語の例に加えている。しかし、実際はAWW IV.3.210も強意語ではない。OEDでは、動詞を強調するこの用法はすでに廃用となっている。

In an excellent manner or degree.

2. In an unusual degree; exceedingly, superlatively, surpassingly; † a. with verbs (obs); b. with adjs.; now only in good sense; c. with adv. *well* (arch.).

(OED, *excellently*)

aの例は1526,1599のADO III.4.13の2例のみで、すでに廃用となっている。つまり *excellent* と *excellently* は、ともに ‘*eminently, exceedingly*’ を意味する強意語として形容詞や副詞だけでなく動詞をも修飾したが、今ではその機能はほとんど廃れている。またこの時代、*excellent* は特に *excellent good* の形で用いられ、その影響からか *excellently* は今は良い意味でしか用いられない。

B-1, MARVELLOUS (×20)

‘*extraordinarily*’ を意味する *marvellous* はWIV II.2.115を除く20例全てが強意語として用いられている。

- | | |
|--|----------------|
| (26) <i>Marvellous</i> sweet music ! | TMP III.3.19 |
| (27) <i>A marvellous</i> witty fellow, I assure you,
but I will go about with him. | ADO IV.2.25~26 |
| (28) I must to the barber's,
mounsieur; for methinks I am <i>marvail's</i> hairy
about the face; | MND IV.1.23~25 |

marvellous が強意語で用いられていない唯一の例が Mrs. Quickly のセリフにあ

る。

- (29) Her husband has a
marvellous infection to the little page; and
 truly Master Page is an honest man. WIV II.2.114~116

これは正しくは affection であるところを infection と言い間違えたマラプロピズムがからんでいる文で、ここでのみ *marvellous* は形容詞として用いられている。シュミットは副詞の用法で ‘joined only to adjectives and adverbs’ として20例全てを、OED は MND IV.1.24を、フランチは形容詞と副詞の前にのみ用いられるとして、ADO IV.2.25, LLL IV.1.130, SHR II.1.73を例に挙げている。つまり強意語の *marvellous* は形容詞と副詞のみを強調し、動詞には用いられなかった。シェイクスピアで頻繁に用いられている *marvellous* は18世紀で強意語の機能は廃れた。

B-2, MARVELLOUSLY (×2)

形容詞と副詞のみを修飾する *marvellous* とは逆に、*marvellously* が動詞にを修飾する例がある。

- (30) Believe me you are *marvellously* chang’d. MV I.1.76
 (31) But you must learn to
 know such slanders of the age, or else you may be
marvellously mistook. H5 III.6.78~81

シュミットは ‘joined only to verbs’ としてこの2例を、フランチも「*marvellous* に反し *marvellously* は動詞に伴って、同じ意味で通用する。」として MV I.1.76を例に挙げている。OED には動詞にのみ用いられるという説明はないが、実際にシェイクスピアは動詞のみを強調しているので、*marvellous* が形容

詞と副詞のみを強調するのにたいして、marvellously は動詞のみを強調する強意語であるといえる。また marvellous の強意語としての機能は廃れたが、marvellously は残存している。

B-1, WONDROUS (X22)

marvellous と共通の用法を持つのが ‘wonderfully’ を意味する wondrous である。

- (32) That is hot ice and *wondrous* strange snow. MND V.3.310
- (33) O my good lord, when I was like this maid,
I found you *wondrous* kind. AWW V.3.309~310
- (34) My heart is *wondrous* light,
Since this same wayward girl is so reclaim'd. ROM IV.2.46~47

シュミットは ‘adverbially before adjectives and adverbs’ として19例を、フランツも形容詞と副詞の前にのみ用いられるとして MND V.1.59, 1H4 I.3.277, ERR III.2.81の3例を、ブルックも MND V.1.59を挙げている。22例のうち、Qqでは

- (35-Qq) I smell it. Upon my life, it will do well. 1H4 I.3.277 (Qq)

となっているところを、Ffでは

- (35-Ff) I smell it:
Upon my life, it will do *wond'rous* well. 1H4 I.3.276~277 (Ff)

となっていて、wondrous が付け加えられている。シュミットとフランツはこのことを指摘してはいるが、なぜそうなったのかについては説明していない。

これは、Qq は 1 行が 11 音節になっているので、Ff では改行して wondrous を加えることによって 10 音節にそろえたためである。

B-2, WONDROUSLY (×1)

また, marvellously と同様に, 動詞を強調する wondrously が 1 例のみ現れる。

- (36) If I might beseech you, gentleman, to repair
some other hour, I should derive much from't; for
take't of my soul, my lord leans *wondrously* to dis-
content.

TIM III.4.68~71

シュミットも OED もこの 1 例を挙げている。

このように marvellous と wondrous は形容詞と副詞のみを強調するという共通の性質を持つ強意語で, それぞれの語に -ly をつけた副詞が動詞を強調する。また marvellous はすでに廃用, wondrous も古語となっているが, marvellously と wondrously は今なお強意語として使われている。

B-1, SORE (×11)

‘grievously, violently’ を意味する sore は 11 例現れる。

- (37) They say King John, *sore* sick, hath left the field. JN V.4.6

- (38) Polyxenes is slain,
Amphimachus and Thoas deadly hurt,
Patroclus ta'en or slain, and Palamedes
Sore hurt and bruised.

TRO V.5.11~14

- (39-Ff) Thus stands she in a trembling ecstasy,
Till cheering up her senses *sore* dismay'd,
She tells them 'tis a causeless fantasy,

And childish error that they are afraid;

VEN895~898 (Ff)

この11例のうち VEN 896は Qq では

(39-Qq) Thus stands she in a trembling ecstasy,

Till cheering up her senses *all* dismay'd,

She tells them 'tis a causeless fantasy,

And childish error that they are afraid;

VEN895~898 (Qq)

となっている。これは音節をそろえるためではなく、Qq の頃には強意語としてよく使われていた *all* が Ff のころにはもの足りなくなったため、*sore* に代えることによって強調をあらわしたのである。シュミットは11例全てを、フ란ツは JN V.4.6, R2 II.1.265, TRO V.5.14を挙げている。OED は、

10. To a great extent; greatly, very much.

Chiefly in contexts suggestive of sense 6, but sometimes merely intensive.

11. With adjs. and advs.: Very, extremely, exceedingly. Obs. exc. dial.

(OED, *sore*)

として、10の例に CYM IV.2.225を挙げている。シュミットやフ란ツは特に触れていないが、OED の11にあるようにシェイクスピアでは *sore* は形容詞と副詞の前にしか現れない。また *sorely* が動詞を修飾している。つまり *marvellous* や *wondrous* と同様の性質を持っていることがわかる。

B-2, SORELY (×6)

sore と同じ意味で、*sorely* が6例現れる。

(40) I did so; but thou strik'st me

Sorely, to say I did.

WT V.1.17~18

- (41) I have done ill,
 Of which I do accuse myself so *sorely*
 That I will joy no more. ANT IV.6.17~19
- (42) Alack, the night comes on, and the [black] winds
 Do *sorely* ruffle; for many miles about
 There's scarce a bush. LR II.4.300~302

シュミットは6例全てを、フランツは「特に動詞に伴って現れる」として WT V.1.18と H8 IV.2.14を例に挙げているが、OED は、

2. a. In such a manner as to cause great pain or bodily injury; severely. Also fig.
3. In such a manner as to press hardly or severely upon a person or thing.
4. To a great extent; in a high degree.

(OED, *sorely*)

とあるうち、4が強意語に該当するが、4の例は LR II.4.301のみで、WT V.1.18は2の例に、ANT IV.6.18と H8 IV.2.14は3の例になっている。これはOEDの誤りで、これらの例はいずれも強意語である。

以上見てきた強意語 *clean*, *excellent*, *marvellous*, *wondrous*, *sore* は、いずれも10例以上用いられていることから、よく使われた強意語だということがわかる。またそれぞれに *-ly* をつけた形に比べ、使用頻度ははるかに高い。しかし *clean* を除き、いずれも今日強意語の機能を失っている。逆に *-ly* 形は *cleanly* 以外今日なお強意語として残っている。

B-1, HORRIBLE (×3)

‘*exceedingly*’ を意味する *horrible* と *horribly* の関係は注意深いものがある。

- (43) But tell me,
Hal, art not thou *horrible* afread? 1H4 II.4.365~366
- (44) So soon as ever
thou seest him, draw, and as thou draw'st, swear
horrible; TN 3.4.177~179
- (45) *Horrible* steep. LR IV.6.3

シュミットはこれら3例を、OEDは‘Horribly, terribly; usually as a mere intensive = Exceedingly’ として LR IV.6.3. を例に挙げている。horrible や terrible はもともと恐ろしいという概念をあらわしているので、強意語になりやすい。

B-2, HORRIBLY (×8)

- (46) He is as *horribly* conceited of him; and pants
and looks pale, as if a bear were at his heels. TN III.4.294~295
- (47) by my troth, it is no addi-
tion to her wit, nor no great argument of her folly,
for I will be *horribly* in love with her. ADO II.3.233~235
- (48) By this leek, I will most *horribly* revenge-
I eat and eas- I swear- H5 V.1.47~48
- (49) But he (as loving his own pride and purpose)
Evades them with a bumbast circumstance
Horribly stuff'd with epithites of war,
(...). OTH I.1.12~17
- (50) She is *horribly* in love with him, poor beast,
But he is like his master, coy and scornful. TNK V.2.62~63

horrible は3回、horribly は8回強意語として現れる。ただし horribly の8例の

うち 3 例は、Qq では *horribly* で現れるところが Ff では *horrible* となっている。
Qq *horribly* → Ff *horrible* (×3)

- (51-Qq) Art thou not *horribly*
afraid? 1H4 II.4.369~370 (Qq)
- (51-Ff) Art not thou *horrible* afraid? 1H4 II.4.410 (Ff)
- (52-Qq) Well, thou wilt be *horribly* chid to-morrow
when thou comest to thy father. 1H4 II.4.373~374 (Qq)
- (52-Ff) Well, thou wilt be *horrible* chidde to morrow,
when thou comest to thy Father: 1H4 II.4.413~414 (Ff)
- (53-Qq) My niece is *horribly* in love with a thing you
have, sweet queen. TRO III.1.97~98 (Qq)
- (53-Ff) My neece is *horrible* in love with a thing you
have sweete Queene. TRO III.1.106~107 (Ff)

シュミットは、これら全ての例を挙げ、Qq と Ff との違いを指摘してはいるが、なぜそのようになったのかについては触れていない。しかしこれらの例も wondrous 同様、Qq では 3 音節の *horribly* を 2 音節の *horrible* に代えることで音節をそろえたのである。*horribly* について OED は

In a horrible manner, or to a horrible degree; so as to make one shudder or tremble; dreadfully, awfully, frightfully: sometimes as a strong intensive = Exceedingly (properly before an adj. having an objectionable sense).

(OED, *horribly*)

として ADO II.3.235 を例に挙げている。ここに ‘properly before an adj. having an objectionable sense’ とあるようにシェイクスピアでは *conceited*, *stuff'd*, *afraid*, *chid* などの語の前で用いられている。

B-1, GRIEVOUS (X3)

3 例のみ強意語として用いられるのが *grievous* である。

(54) he cannot come, my lord, he is *grievous* sick. 1H4 IV.1.16

(55) Rumor if abroad

That Anne, my wife, is very *grievous* sick;

I will take order her keeping close. R3 IV.2.50?52

(56-Qq) Old John of Gaunt is *grievous* sick, my lord,

Suddenly taken, and hath sent post haste

To entreat your Majesty to visit him. R2 I .4.54~56 (Qq)

ただし、このうち R2 I .4.54の *grievous* は Ff では *very* となっている。

(56-Ff) Old John of Gaunt is *very* sick my Lord,

Sodainly taken, and hath sent post-haste

To entreat your Majesty to visit him. R2 I .4.55~57 (Ff)

このことから *grievous* は ‘*very*’ を意味していることがわかる。またこれら 3 例はすべて *grievous sick* の形でしか用いられていないので、*sick* のみを強調して用いられることがわかる。シュミットは R2 I .4.5.41 と H4 IV.1.16 を、フランクは R2 I .4.5.41 を例に挙げている。OED は ‘*quasi-adv.*’ として、1596 の H4 IV.1.16 のみ例に挙がっている。さらに他のいかなる作家にも例がないことからシェイクスピアしか *grievous* を強意語に用いていなかったことがわかる。

B-2, GRIEVOUSLY (X6)

grievously は *grievous* よりも多く現れる。

- (57) If it were so, it was a grievous fault,
 And *grievously* hath Caesar answer'd it. JC III.2.79~80
- (58) I do suspect thee very *grievously*. JN IV.3.134
- (59) You say he has been thrown in the rivers,
 and have been *grievously* peaten as an old oman. WIV IV.4.20~21

シュミットは ‘painfully, heavily’ として WIV IV.4.21, V.1.20, OTH V.1.5 を,
 ‘distressfully’ として TGV III.2.14, JC III.2.80 を, ‘criminally’ として JN IV.3.
 134 を挙げているが、これらはいずれも強意語である。OED は、

2. In a great or serious degree; heavily, deeply, strongly, exceedingly, etc. (In
 early, and occas. in mod. use, with more or less suggestion of the etymological
 sense.) (OED, *grievously*)

として JN IV.3.134 を挙げている。

以上の *horrible* と *grievous* は 3 例見られる強意語である。horribly や grievously のほうが多く現れているが、それはおそらく強意語としての歴史が長いからであろう。初出年を示す。

horrible-c1400 ,	grievous-1596
horribly-1340 ,	grievously-1340

B-1, DAMNABLE (×2), MONSTROUS (×2)

わずか 2 例強意語として用いられているのが *damnable* と *monstrous* である。

- (60) Is it not meant *damnable* in us, to be
 trumpeters of our unlawful intents? AWW IV.3.26~27
- (61) That thou betrayedst Polixenes, 'twas nothing-
 That did but show thee, of a fool, inconstant,

- And *damnable* ingrateful; WT Ⅲ.2.185~187
- (62) I'll speak in a *monstrous* little voice, "Thisne!
Thisne! Ah, Pyramus, my lover dear! thy Thisby
dear, and lady dear!" MND I.2.52~54
- (63) Thou this to hazard needs must intimate
Skill infinite, or *monstrous* desperate. AWW Ⅱ.1.183~184

damnable についてシュミットは両方を、フランツは WT Ⅲ.2.187 を例に挙げている。OED には、'Damnably, execrably; also as a strong intensive. Obs.' とあり、1611 の WT Ⅲ.2.187 を初例に 1668, 1678, 1712-35 の 4 例しか例がなく、約 100 年後には強意語としての機能は廃れている。

monstrous についてはシュミットもフランツもブルックもこの 2 例を挙げている。OED は、

† 8 a. Used as a colloquial or affected intensive. Obs.

b. quasi-adv. in the sense : Exceedingly, wonderfully 'mighty.' Now mainly U.S.
(OED, *monstrous*)

として b の例に MND I.2.54 を挙げている。'Now mainly U.S.' とあるのは、この時代の英語がアメリカに受け継がれたという証拠である。

B-2, DAMNABLY (×1), MONSTROUSLY (×0)

シェイクスピアは *damnably* を 1 回のみ、*monstrously* は 1 度も用いていない。

- (64) I have misus'd the king's press *damnably*. 1H4 Ⅳ.2.14

damnably に関して OED は、

2. In a ‘damnable’ way, execrably, confoundly; sometimes merely as a strong intensive. (Now considered vulgar or profane.) (OED, damnably)

として1596の1H4 IV.2.13を初例に, 1667, 1687, c1753, 1843の5例を挙げている。

monstrouslyは,

2. † a. In an unnatural or extraordinary manner.
b. To a monstrous degree; in later use often as a mere intensive, ‘hugely,’ ‘vastly.’ (OED, monstrously)

とあり, a は1555, 1588, 1646, 1797の4例のみで廃れているがb は今日でも用いられる。

B-1, ABUNDANT (×1), INTOLERABLE (×1), PLAGUY (×1)

ただ1回強意語に用いられているのが abundant, intolerable, plaguy で, フラ
ンツもシュミットもその1例しかないといっている。

- (65) (…), and, Mercury, lose
all the serpentine craft of thy caduceus, (…),
which short-arm’d ignorance itself knows is so
abundant scarce, (…). TRO II.3.10~17
- (66) Her only fault, and that is faults enough,
Is that she is *intolerable* curst
And shrowd and froward, (…). SHR I.2.88~90
- (67) He is so *plaguy* proud that the death-tokens of it
Cry ‘No recovery.’ TRO II.3.117~118

OED には, abundant については ‘quasi-adv.’ として a1725 の 1 例しかなく, シェイクスピアにこの例はない。また 1 例しかないことからほとんど強意語として使われていないことがわかる。intolerable については,

† B as adv. Intolerably, insufferably; also, as a strong intensive. Exceedingly, extremely. Obs. (OED, intolerable)

として 1592, 1596 の SHR I .2.89, 1645, 1716 の 4 例のみ挙げている。つまり intolerable は強意語として一時的に用いられ, 約 100 年ほどで廃れた。

plaguy は,

Usually indicating a degree of some quality that troubles one by its excess; but sometimes humorous, or merely forcibly intensive. Colloq.

(OED, plaguy)

とあり, この例が挙げられている。フランツは, plaguy は「下層の日用語に属していた」といっているが, このセリフはギリシア軍の将軍 Ulysess のもので, シェイクスピアは plaguy をこの強意語の 1 回しか用いていないため, 実際の階級の人々が用いていたかはわからないが, おそらくフランツは口語表現ということで下層の日用語としたのだろう。だが, 上層階級でも口語表現は用いられていたと考えられる。

B-2, INTOLERABLY (X0), PLAGUILY (X0)

intolerably と plaguily はシェイクスピアでは現れない。

† b. As a strong intensive: Excessively, extremely, ‘awfully.’ Obs.

(OED, intolerably)

In a plaguy manner; colloq. vexatiously, ‘pestilently,’ confoundedly, exceedingly.
(OED, plaguily)

intolerably は1768, 1821の2例しかないので、ほとんど強意語として使われなかった。一方 plaguily は5例あり, plaguy 同様口語ではあるが現在でも強意語として使われる。

以上、特徴的な形容詞と同形の強意語をみてきたが、これらは -ly 形の用例が比較的少ない。というのも副詞語尾 -ly は、ModE. に出てきたためシェイクスピアの時代では未だそれほど知られていないからである。例えば exceedingly, cleanly, excellently, marvellously, sorely, wondrously はその語尾 -ly のない形が10例以上用いられているのに対して、-ly 形の副詞は5回程度しか現れず、なかでも wondrously は1回しか用いられていない。そこで、逆に、-ly 形では頻繁に現れるが、-ly のない形では全く用いられていない強意語をみていく。

B-2, CLEARLY (×3)

‘completely, entirely’ を意味する clearly は3例現れる。

- (70) A most extracting frenzy of mine own
From my remembrance *clearly* banish'd his. TN V.1.281~282
- (71) 'Tis strange to think how much King John hath lost
In this which he accounts so *clearly* won. JN III.4.121~122
- (72) O, bravely came we off,
(...) we bid good night,
And wound our tott'ring colors *clearly* up,
Lost in the field, and almost lords of it! JN V.5.4~8

シュミットは TN V.1.282 と JN III.4.122 は強意語としているが、JN V.5.7 は強意語ではないとしている。これはシュミットの誤りである。フランツは「昔

はその意味・用法において clean と接触していた」 として JN V.5.7 と TN V.1.282 を例に挙げている。OED にも, ‘Thoroughly; completely; unreservedly; entirely; = clean. Obs.’ とあるので, clearly は cleanly 同様 clean と同じように用いられていた。clean と clear が強意語として生き残ったのに対して clearly は廃用となった。また OED は ‘manifest-ly; evidently’ として JN III.4.122 を例に挙げているが, これは OED の誤りである。このようにみても, シュミットや OED が間違っていることから, clearly は意味の区別がしにくいことがわかる。

B-1, CLEAR (×0)

シェイクスピアでは強意語として現れないが, clear は clean と同じ性質をもっている。OED には clear が clean の影響を受けて副詞として用いられるようになったとある。

[Clear is not originally an adverb, and its adverbial use arose partly out of the predicative use of the adjective, as in ‘the sun shines clear’; partly out of the analogy of native English adverbs which by loss of final -e had become formally identical with their adjectives, esp. of clean adv.; which it has largely supplanted.]

5.a. Completely, quite, entirely, thoroughly; = clean. Obs. exc. dial. U.S.

b. With *away, off, out, through, over* and the like; esp. where there is some notion of getting clear of obstructions, or of escaping; = clean.

(OED, clear)

b の用法は clean の c の用法と同じものだが, clean が c1500 から c の用法で用いられたのに対し, clear は 1600 から b の用法で用いられはじめた。このことから clear は clean の影響で強意語に用いられるようになったことがわかる。また clean 同様 clear も今日なお強意語の機能を保っている。フランスも「off,

away のごとき副詞と結んで clear は今日未だこの意味で用いられる」といっている。

B-2, CRUELLY (×1)

‘extremely’ を意味する cruelly はただ 1 度現れる。

(73) But, good Kate, mock me

mercifully, the rather, gentle Princess, because I love

thee *cruelly*.

H5 V.2.201~203

シュミットもフランツも OED もこの例のみを挙げている。

B-2, CRUEL (×0)

cruel はシェイクスピアには現れない。

5. Cruelly, distressingly; hence as a mere intensive = exceedingly, very. Obs. exc. dial. (OED, cruel)

B-2, MAINLY (×5)

‘very’ を意味する mainly は 5 例あらわれる。

(74) But tell me

Why you [proceeded] not against these feats

So criminal and so capital in nature,

As by your safety, greatness, wisdom, all things else

You *mainly* were stirr’d up.

HAM IV.7.5~9

(75) These four came all afront, and *mainly* thrust

at me.

1H4 II.4.200~201

- (76) for I am *mainly* ignorant
 What place this is, and all the skill I have
 Remembers not these garmants; LR IV.7.64~66
- (77) In this I do not call your faith in question
 So *mainly* as my merit. TRO IV.4.84~85
- (78) Twenty times had been for better,
 For there the cure lies *mainly*. TNK V.2.7~8

シュミットは TNK II.7.8を除く 4 例を, フランツとブルックは LR IV.7.54を例に挙げている。OED は,

† 2 In a great degree; greatly, considerably, very much, a great deal. Also occas. entirely, perfectly. Obs.

† b. Abundantly, copiously; lavishly. (OED, mainly)

として a に HAM IV.7.9と LR IV.7.65を例に挙げている。この用法はすでに廃用になっているが, 以下のような説明が続く。

c. Used as an intensive with adjs. and advs. = Very, exceedingly. = main adv. Now dial. (OED, mainly)

つまり, シェイクスピアの時代に用いられた a の意味は19世紀になって廃れたが, 1670年以降は c の意味で, 形容詞と副詞にのみ用いられるようになった。

B-1, MAIN (X0)

main の初例は1632年で, シェイクスピアの時代にはまだ強意語として現れていない。

Now dial. Very, exceedingly. (After the 17th c. chiefly in representations of rustic or illiterate speech.) (OED, main)

B-2, MERELY (×14)

‘absolutery, entirely’ の意味の *merely* は14例現れる。

(79) that I

drave my suitor from his mad humor of love to a
living humor of madness, which was, to forswear
the full stream of the world, and to live in a nook
merely monastic.

AYL III.2.417~421

(80) ‘Tis an unweeded garden

That grows to seed, things rank and gross in nature
Possess it *merely*.

HAM I.2.135~137

(81) (…), and

Give up yourself *merely* to chance and hazard,
From firm security.

ANT III.7.46~48

フランツとストッフエルは HAM I.2.137と ANT III.7.47を、OED は HAM I.2.137を例に挙げている。シュミットは14例挙げているが、そのうち OTH I.3.334は強意語ではない。*merely* には c1580から ‘only’ の意味もあるので、強意語との区別が難しい。OED には1564, 1597, 1601, 1602の HAM I.2.137, 1613, a1619, 1633, 1728, 1788の9例あるが、一時的に頻繁に使用されたため今日強意語の機能は廃れ、‘only’ の意味のみ残っている。

B-1, MERE (×1)

merely と同じ意味の *mere* は1回現れる。

- (82) Ay, surely, *mere* the truth, I know his lady. AWW III.5.55

OED には1534, 1577, 1601のAWW III.5.58, 1618, 1635の5例しかたなくて、すでに強意語の機能は廃れている。

B-2, SHREWDLY (×10)

‘grievously’ の意味の *shrewdly* は10例現れる。

- (83) He’s *shrewdly* vex’d at something. AWW III.5.89
- (84) I wish we may; but year have I a mind
That fears him much; and my misgiving still
Falls *shrewdly* to the purpose. JC III.1.144~146
- (85) The air bites *shrewdly*, it is very cold. HAM I.4.1

シュミットは10例全てを、フランツはAWW III.5.85と HAM I.4.1を、ブルックと OED はAWW III.5.85を例に挙げている。OED には、

5. Qualifying a word or phrase expressive of a painful or adverse condition, menacing or disquieting action, violent or oppressive treatment; passing into a mere intensive: Grievously, intensely, seriously.

(OED, *shrewdly*)

という強意語の説明のほかに、

† 2. Of wounding, hurting, cutting: Sharply, severely. Often in fig. context. Obs.

(OED, *shrewdly*)

として HAM I.4.1と TRO III.3.228が例にあるが、これは OED の誤りで、この

2 例も強意語である。

B-2, THOROUGHLY (×17)

‘thoroughly’ を意味する *thoroughly* は17例あらわれる。

- (86) Sirra Biondello,
Now do your duty *thoroughly*, I advise you. SHR IV.4.10~11
- (87) I am informed *thoroughly* of the cause. MV IV.1.173
- (88) My point and period will be *thoroughly* wrought,
Or well or ill, as this day's battle's fought. LR 2.7.95?96
- (89) To-morrow toward London back again,
To look into this business *thoroughly*,
And call these foul offenders to their answers,
And poise the cause in justice' equal scales,
Whose beam stans sure, whose rightful cause prevails. 2H6 II.1.197~201

シュミットはこれら17例すべてを, フランツは TMP III.3.14, TGV I.2.112, LR IV.7.95の3例を, ブルックは LR IV.7.95を例に挙げている。OED は

1. fully, completely, perfectly; = thoroughly 2

(OED, *thoroughly*)

として MV IV.1.173を,

2. in a thorough manner or degree; in every part or detail; in all respects; with nothing left undone; fully, completely, wholly, entirely, perfectly.

(OED, *thoroughly*)

として2H6 II.1.198を例に挙げている。

§2, Bの強意語の特徴

§1ではシェイクスピアに現れる強意語をみてきたが、B-1, abundant, clean, clear, cruel, damnable, excellent, grievous, horrible, intolerable, marvellous, main, mere, monstrous, plaguy, sore, wondrous は形容詞と同形の副詞である。ではなぜ形容詞と副詞が同形なのか。

古期英語の副詞接尾辞 -e は、どの語尾音 e でも同じように15C以来黙音になり、そのため副詞はエリザベス時代以来しばしば形容詞の形であらわれる：OE. hearde - ModE. hard, OE. fæste - ModE. fast, OE. déope - ModE. deep, OE. rihte - ModE. right, OE. fæðere - ModE. fair, OE. lange - ModE. long, OE. hlúde - ModE. loud; OE. sære - ModE. sore, OE. wide - ModE. wide. この類の副詞のほかには別の類がある。中性形が副詞的に用いられる形容詞がそれである：OE. 3esund - ModE. sound, OE. sláw - ModE. slow. この両類の語は中期英語時代に、古期フランス語由来の、すでに古仏語で副詞として機能のあった中性形形容詞：*quite, close, just, round, plain* によって増加した。従って、16Cには古い時代からの形容詞の語形をもつ副詞が相当数存在したのである。それ以来あらゆる形容詞がまず副詞としても用いられることが可能であった。つまり、古期英語の副詞語尾 -e の黙音化と中性形形容詞の副詞的用法により、形容詞と同形の副詞が存在するようになったのである。

また接尾辞 -e のほかにすでに古期英語にははるかに多くあらわれる副詞語尾 *lice* があって、それから ME. -lich(e), ModE. -ly が出たのである。-ly は副詞語尾中の語尾というべきものとなり、それによっていかなる由来の形容詞も副詞に変えることができるのである。動詞概念を限定もしくは修飾する副詞はシェイクスピアでは大部分の場合 -ly 形であらわれているが、無語尾類の影響はなお非常に大きく、前者と並んで同じ副詞がときおり形容詞形でもあらわれ、二重語形は実に古期英語ですでに -e と -lice とで終る平行形式が存在していた場

合ばかりでなく、ロマンス・ラテン語にも同じ形式がみられるのである：deep (OE. deópe—deeply (OE. deóplíce), sore (OE. sáre)—sorely (OE. sárlíce); sure—surely, natural—naturally. (cf. フランツ, 『シェイクスピアの英語』 § 241)

ここに「動詞概念を限定もしくは修飾する副詞はシェイクスピアでは大部分の場合 -ly 形であらわれている」と述べたとおり、今までみてきた強意語は、clean や excellent の例外はあるものの、大部分 -ly 形が動詞を修飾している。

- (17) What, hast, not thou full often strook a doe,
And borne her *cleanly* by the keeper's nose ? TIT II .1.93~94
- (24) Excellently done, if God did all. TN I .5.236
- (30) Believe me you are *marvellously* chang'd. MV I .1.76
- (36) If I might beseech you, gentleman, to repair
some other hour, I should derive much from't; for
take't of my soul, my lord leans *wondrously* to dis-
content. TIM III .4.68~71
- (64) I have misus'd the king's press *damnably*. 1H4 IV .2.13
- (71) 'Tis strange to think how much King John hath lost
In this which he accounts so *clearly* won. JN III .4.121~122
- (85) The air bites *shrewdly*, it is very cold. HAM I .4.1
- (86) Sirra Biondello,
Now do your duty *thoroughly*, I advise you. SHR IV .4.10~11

このように -ly 形の副詞が動詞を修飾し、強調する。また -ly 形の副詞は形容詞と同形の副詞にある「形容詞と副詞のみに用いられる」というような特徴がないため、意味の特定がし難く、強意語とそれ以外の区別が困難である。そのため、シュミットも OED もしばしば間違っているのである。

第3章 C・D, 名詞形の副詞と特殊例

§ 1, C, 名詞形の副詞

C, VENGEANCE (×1)

55例ある *vengeance* のなかで, ただ1例のみが ‘extremely, intensely’ を意味する強意語として現れる。

- (92) That's a brave fellow; but he's *vengeance*
proud, and loves not the common people. COR II .2.5~6

シュミットもフランツもブルックもこの1例のみとしている。OED は1548, 1566, 1607の COR II .2.5, a1616, 1710-11の5例を挙げ, この用法はすでに廃用となった。名詞の *vengeance* が強意語になったのは, 名詞の意味に強意があったからである。

C, WHORESON

1例のみの *vengeance* に対して11例現れるのが *whoreson* である。

- (93) Ah, *whoreson* little valiant villain, you! 2H4 II .4.209
(94) A *whoreson* cold, sir, a ough, sir which I
caught with ringing in the King's affairs upon his
coronation-day, sir. 2H4 III .2.181~183
(95) A *whoreson* mad fellow's it was. HAM V.1.176

フランツは「一種の形容詞的強意語として, 粗野な通俗語」と述べ, 2H4 III .2.181を例に挙げている。シェーラーも2H4 II .4.209の例を挙げている。たしかに *whoreson* は *whoreson* round man や *whoreson* upright rabbit, *whoreson* rascally tisick, *whoreson* mad ferrow's, *whoreson* indistinguishable cur, *whoreson* dead

body から、一見すぐ後ろにくる形容詞を修飾している強意語のように見える。しかし実際は、形容詞とその後ろの名詞全体を修飾している形容詞の相当語であって強意語ではない。whoreson の前に a や you などがあることも、whoreson が形容詞である証拠である。ではなぜフランツやシェーラーは whoreson を強意語と間違えたのか。それは、2 人の挙げている 2 例が極めて副詞と間違えやすいものだからである。whoreson little valiant villain は whoreson の後が形容詞 + 形容詞 + 名詞となっているため、whoreson を形容詞に係る副詞ととってしまったのだろう。whoreson cold は他の例と異なり、形容詞 + 名詞の形になっていないので、whoreson は cold に係る副詞のような印象を受ける。しかし実は、この cold は形容詞ではなく名詞なのである。この個所の cold が名詞であるということをシュミットも OED も述べている。そのため OED もシュミットも whoreson を強意語とはしていない。OED は、

b. attrib.: commonly as a coarsely abusive epithet, applied to a person or thing: vile, abominable, execrable, detestable, 'wretched', 'scurvy', 'bloody'; also sometimes expressing humorous familiarity or commendation.

(OED, whoreson)

として 2H4 II.4.209 と 2H4 III.2.181 を例に挙げている。シュミットも

Adjectively applied not only to persons, but to anything, as a term of reproach or ludicrous dislike, and sometimes (as in the language of Doll Tearsheet) used even in a tone of coarse tenderness:

(*Shakespeare-Lexicon*, whoreson)

として 2H4 II.4.209 と 2H4 III.2.181 を含む 37 例を挙げている。このように一見強意語のようにおもえた whoreson はシュミットや OED のいうように形容詞の役割を持っているのであって、強意語ではないことがわかる。つまり、フラン

ツとシェーラーは間違っているのである。

§ 2, 特殊例

D, HOME (×45)

特殊な強意語として home がある。

- (96) I will pay thy graces
Home both in word and deed. TMP V.1.70~71
- (97) Single you thither then this dainty doe,
 And strike her *home* by force, if not by words;
 This way, or not at all, stand you in hope. TIT II.1.117~119
- (98) Mend and charge *home*,
 Or, by the fires of heaven, I'll leave the foe
 And make my wars on you. COR I.4.38~40
- (99) But I will punish *home*. LR III.4.16

シュミットは ‘to the quick, so as to make the intended effect’ として31例挙げている。フランツは「動詞に伴う home は一つの行為をその最後の限界、その目的まで（勢いよく）貫徹すること示す、それからさらに、達成されれば生々しく意識に上ってくるような目的の遂行を示す、ゆえに ‘sensibly, to the quick’ の意がある。今は home の副詞的用法はかなり制限されている」として、MM IV.3.143, COR I.4.38, II.2.103, LR III.4.16の4例を挙げている。OED は

- 4.a. Of physical actions: To the point or mark aimed at; to its ultimate position, as far as it will go; so as to reach, touch, or penetrate effectually; into or in close contact; closely, directly.
5. fig. a. To the very heart or not root of a matter; into close and effective

contact; so as to touch, reach, or affect intimately; closely, directly, effectively, thoroughly, out of out. **to bring a charge home to** (a person): to fix it upon him, convict him of it (OED, home)

として CYM III.5.92 を例に挙げている。4 の意味も 5 の意味も 1540 年代から用いられている。このように home は動詞に伴って、その行為の目的の達成を示す強意語である。home はもともと副詞なので、制限されてはいるけれど、今日でもなお強意語として用いられている。

参考文献（抄）

- シェイクスピアの原文は Riverside Shakespeare により、グローブ版などを参照した。
 フォリオ版は The Norton Facsimile, クォート版は南雲堂版。
 J.B.Greenough & G.L. Kittredge, *Words and their Ways in English Speech*, 1920, Macmillan.
 C.Stoffel, *Intensives and Down-toners*, 1901, Carl Winter's Universitätsbuchhandlung
 (乾 亮一他訳, ストッフエル, 『強意語と緩和語』 1971, 研究社)
 G.L.Brook, *The Language of Shakespeare*, 1976, Andre Deutsch
 (三輪伸春他訳, ブルック, 『シェイクスピアの英語』 1998, 松柏社)
 M.Scheler, *Shakespeares Englisch*, 1882, Erich Schmidt
 (岩崎春雄・宮下啓三訳, シェーラー, 『シェイクスピアの英語』 1990, 英潮社新社)